

和歌山市における結核患者支援 ～ DOTSネットワークの構築にむけて～



和歌山市保健所 保健対策課 岡本 真奈美

はじめに

和歌山市は紀伊半島の北西部に位置する人口37万5718人(平成17年10月1日現在)の中核市である。

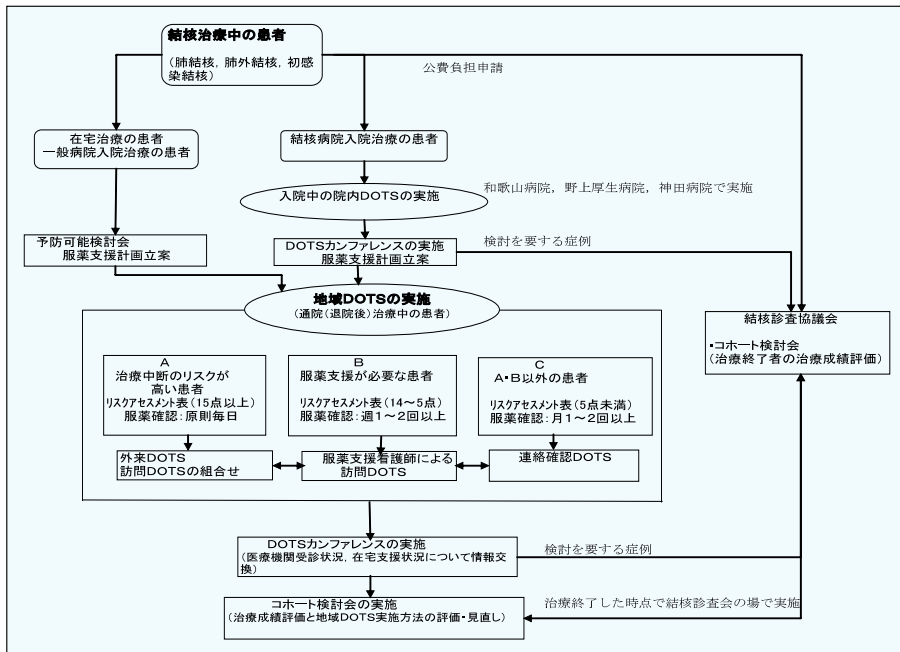
結核新登録患者数・罹患率は常に全国値を上回っていたが、平成16年には新登録患者82人、罹患率21.6(全国23.3)と、初めて全国値を下回った。結核新登録患者のうち70歳以上の高齢者が占める割合は平成14年50.0%,平成15年53.1%,平成16年53.6%,平成17年56.9%と全国値を大幅に上回っており、年々増加している。

地域DOTSの概要

和歌山市では、平成15年度より「和歌山市DOTS支援事業」を立ち上げ、これまで3保健センターで行っていた結核患者管理業務を保健所で一元管理することとなった。また、事業開始と同時に服薬支援看護師を雇用し、結核患者の退院後の地域服薬支援事業を本格的に開始することとなった。

服薬支援計画は、登録時と登録から3ヵ月時のコホート検討会でリスクアセスメント票を用い、国が示した『日本版DOTS』に合わせてA:原則毎日、B:週1~2回以上、C:月1~2回以上の3段階

和歌山市DOTS支援事業の概要



にランク付けしている。また、必要時には適宜、支援計画の見直しを行っている。

訪問DOTSの実際

服薬支援計画で支援B(週1~2回以上の服薬確認)と判定された患者に対して、初回訪問は担当保健師と服薬支援看護師が同伴訪問し、訪問DOTSを開始する。服薬支援看護師は週1~2回訪問し、直接服薬確認・残薬・手帳・空袋で確認している。

訪問DOTS実績

年度	訪問看護師数(人)	出勤日数(1月あたり)	訪問実人数(人)	訪問延人数(人)	月平均訪問延人数(人)	1日平均訪問人数(人)
平成15(5月~)	1	10	20	282	25.6	2.56
平成16	2	20	36	447	37.3	1.86
平成17	2	30	50	736	61.3	2.04

事例紹介

患者: 80歳代 女性

登録時分類: 喀痰塗抹陽性・初回治療

家族構成: 本人, 息子(軽度知的障害)の2人暮らし

服薬アセスメント: 支援B

服薬支援計画:

(日)	本人
(月)	本人
(火)	デイサービス送迎者
(水)	ヘルパー
(木)	服薬支援看護師
(金)	デイサービス送迎者
(土)	ヘルパー

経過: かかりつけ医で診断後、結核病床を有する病院に入院。約2ヵ月間院内DOTSにて治療を受け、退院と同時にかかりつけ医に転医となった。退院前より、ケアマネジャーに連絡し、ヘルパー・デイサービス提供者に協力を依頼した。へ

ルパー事業所には保健師が直接訪問して、管理者・担当ヘルパーにDOTSによる服薬確認の必要性を説明した。在宅治療開始後、ヘルパー利用日はヘルパーが本人に内服を確認し手帳にサインし、デイサービス利用日は送迎者が同じ手帳にサインしている。さらに、週1回服薬支援看護師が訪問し、1週間分の内服を残薬と手帳より確認して、翌1週間分の薬を薬整理ケースに分け入れている。現在のところ飲み忘れや薬の間違いはなく服用できている。

DOTSネットワーク推進会議

和歌山県内の結核病床を有する3病院においては、院内DOTS及び保健所とのDOTSカンファレンスが実施できており、これらの病院と保健所との服薬支援連携は整いつつある。また、保健所においては服薬支援看護師を中心とした地域DOTSを実施している。しかし、一般病院に他の病気で入院中または外来治療中の患者については、訪問DOTSを導入した患者のみ、主治医に服薬支援の説明をしていたため、医療側に保健所の取り組みが十分伝わっていない現状があった。そこで、平成16年度より、保健所と結核指定医療機関等、結核医療に関わる関係機関のネットワークを構築し、結核患者に対する適正医療の徹底と同時に、患者一人一人に見合った服薬支援実施体制を確立することを目的に「DOTSネットワーク推進会議」を開催することとなった。

初年度は医師、看護職等医療職を対象に開催し、「患者の治癒という同じ目標のために連携しあう仲間なのだから、無用な遠慮は不要」と共通認識を確認することができた。

さらに、平成17年度はスタッフからの「DOTSの普及には今後医療職だけでなく、介護保険サービス提供者など福祉職の協力が不可欠」との意見を反映し、福祉職を対象とした会議も開催した。

福祉職を対象とした会議でのアンケート調査では、「DOTSの必要性について理解できましたか」という質問に100%が「理解できた」との結果であった。感想欄では「初めて耳にした『DOTS』であったが、思いのほか身近であり重要であると認識した」と結核患者に対するDOTSの重要性について理解を得ることができた。また、「DOTSは結核治療の視点からの取り組みと理解しましたが、結核以外の病気の内服管理・服薬管理等についても取り組みがあるといいなと思いました」と、他疾患に対する服薬の重要性を提起する意見もあり、患者（サービス利用者）をあらゆる側面から連携しながら支援する必要があることを再認識する機会となった。

次年度はネットワークの基盤となる連携マニュアルの作成を目標に開催する予定である。

DOTSネットワーク推進会議 開催状況

年度	対象	参加者数
平成16	医師等医療職	33名
	看護職等医療職	46名
平成17	福祉職	51名
	医療職	35名

まとめ

結核予防法が改正され、結核の治療に関して『DOTS』という言葉の記載はないものの、確実な服薬支援について明記されたところである。

また、結核患者の入院期間の短縮化、高齢化の進展から、地域での服薬支援体制の充実がますます必要となってきている。その中で、介護サービス提供者等福祉職の関与は重要である。福祉職において、「服薬指導」は難しいかもしれない。しかし、飲み忘れ・間違いを防止するための「服薬確認」は十分可能と考える。普段患者に頻回に関わる職種の協力が得られれば、飲み忘れや間違いを早期発見することができる。また、これらの情報を保健所と医療機関が共有することが患者の確実な服薬につながり、治療成功に導くことができる。

このように、患者に関わる様々な職種が、互いの機能や役割を理解し、相互連携することで、服薬支援のネットワークが広がり、一人一人の患者に適した柔軟な支援体制の構築が可能となる。

今後の課題

DOTSネットワーク推進会議への参加者数の増加などから、和歌山市においても結核患者服薬支援についての理解と協力体制が少しずつ普及しているところである。

一方、服薬支援協力を依頼するにあたり、「結核」という病気に対する偏見や先入観、誤った知識、業務が過剰になるのではないかという心配などから協力を得にくい現状もある。結核に関する正しい知識を普及させるために、引き続き啓発活動が必要であると考えられる。

今後も、一つ一つのケースを大切にしながら、保健所が中心となって患者を取り巻く諸機関・多職種に積極的にアプローチし、全ての患者の治療完遂を目標に、和歌山市における「DOTSネットワーク」の構築を目指したい。

参考文献：『保健師・看護師の結核展望』No.85～86、結核予防会